

10月23日(火)

## ないじえる芸術共創ラボ 古典インタプリタ日誌 ピーター マクミランさんWS 英訳にチャレンジ 江戸の美意識との出会い

### 1,9回目のご来館

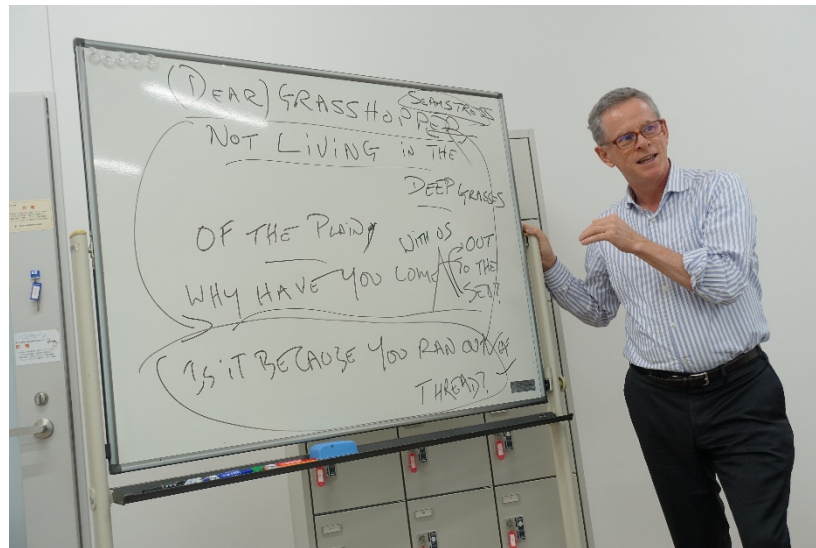
マクミランさん9回目のご来館(10月23日)では、前回に引き続き和歌を専門とする若手研究者の米田有里先生(湘北短期大学非常勤講師)をお招きし、卷子本『阿不幾集』<sup>あふぎしゅう</sup>についてのワークショップを行いました。

### 2,和歌についてのワークショップ

ワークショップでは、『阿不幾集』の和歌4首について先行研究をふまえながらよりよい解釈・英訳を検討しました。

- ・逢ふてのちうらみんよりは中々に あはで久しくもの思はばや
- ・草深き野辺には住まで機織りの ぬきがたらぬか海に来たるは
- ・住吉の松の葉越しにながむれば 月おちかかるあはぢしま山
- ・ゆき暮れて木の下影を宿とせば 花や今宵のあるじならまし

今回は、米田先生による和歌についての解説のあと、マクミランさんが直訳した和歌について、鑑賞のポイントや言葉の選択について一緒に検討することにいたしました<sup>1</sup>。



### 3,メルヘンな世界観—きりぎりすとの会話—

「草深き野辺には住まで機織りの ぬきがたらぬか海に来たるは」  
この歌について米田先生と共に解釈を行い、「草が深く生い茂った野には住まないでこの海まで来たのは、機織りのぬきが足りないの」  
す。

<sup>1</sup> マクミランさんはなるべく5行の詩になるように努めておられま

10月23日(火)

か」と現代語に訳してみました。

米田先生によると「機織り」とはきりぎりすの別称で、「ぬき(緯、横糸の意)」が縁語なのだそうです。

また米田先生は、この歌と同様の和歌が収められている『かさね草紙』(寛永21年〈1644〉以前成立)に、このような文章が添えられていることを示してくださいました。

太閤様、伏見より船にめし、大坂へ御くたりありけるに、いづくともなく、機織虫、舟のうちへとひ来たりけり。太閤様、面白しやとおぼしめしけん、是にて一首とありければ、細川殿詠める、

野辺に住む機織り虫の舟に来て海にくだるはぬきがたらぬかとなん詠みたまひければ、舟端をたたきさざめきたまひけり。

添えられている文章(詞書き)からは、この歌が詠まれたシチュエーションがうかがえます。船旅の最中の武将達がきりぎりすを見付けて驚き、なぜ海の真ん中にきてしまったのか、と語りかけるユーモアが印象的です。

このような文章は『阿不幾集』にないので、これほど詳細な状況を知ることはできないものの、それでも野原ではなく海の上できりぎりすにであった驚きや、きりぎりすを本物の機織りに見立てて話しかけているさまは充分につたわります。

マクミランさんはこの歌のメルヘンで楽しい雰囲気をつくるために、子供向けの童話のように遊びを入れながら訳してみることを提案されました。



そこで、きりぎりすに話しかける様子がよく伝わるよう、「Dear, Grasshopper」という表現を採用。ナンセンスな表現ではありますが、きりぎりすを人に見立てた原文がナンセンスで楽しいのでそのまま残したそうです。

また「機織り」については、まず「seamstress」という表現をあてられました。これは「機織りをしている女の子」という位の意味で、なんとなく古典的、文学的な言葉なのだそうです。ただし、原文から愉快的感じのきりぎりすを思い浮かべられるため、わんぱくな男の

10月23日(火)

子かな?という気もします。「sewer」というジェンダーフリーの表現も候補にあがりました。

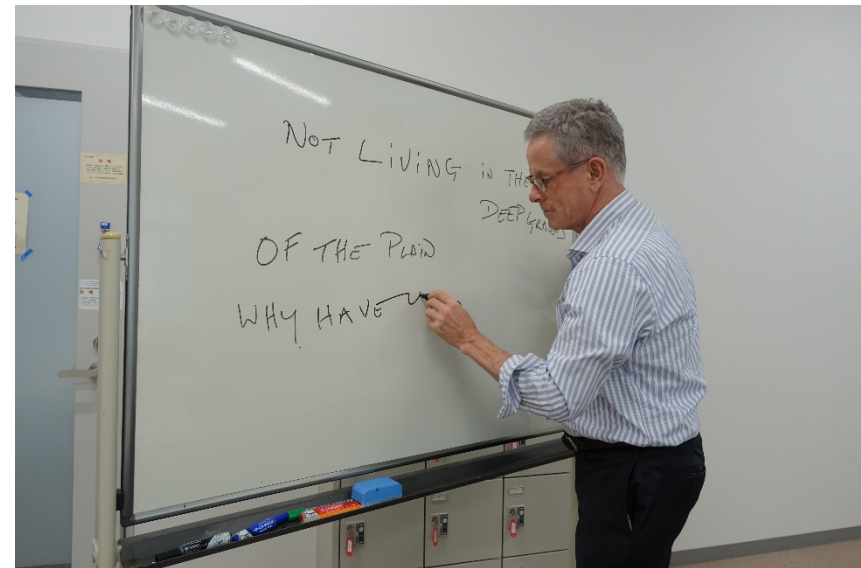
また、この歌のクライマックスは、きりぎりすを海で見つけた驚きだと考えられたマクミランさん。英語ではクライマックスを重視するので、その部分は最後に持ってくることにしました。

検討を踏まえて作った英訳がこちらです。

Dear, Grass hopper seamstress (sewer) / Not living in the deep  
grasses / Of the plain. / Why have you come with out to the  
sea? / Is it became you ran on the sea?

先に述べたように、『扇の草紙』には『かさね草紙』のような詞書きはないので、詠み手が舟の上にいるなどの情報はありません。このような和歌の背景も一緒に訳すかどうかという点も問題になるところですが、マクミランさんはあくまでも『扇の草紙』鑑賞に焦点をあてて訳してゆきたいとお考えなのでした。

それに加え、そういった背景がわからなくとも、表現を選ぶことで元の和歌が持つ世界観がしっかり伝わります。情報を全て入れるのではなく、英語の持つ力、世界観を使うということですね。



### 3, 切ない恋の歌—“もの思ふ”は英訳できるか—

「逢ふてのちらみんよりは中々に あはで久しくもの思はばや」  
この歌について、米田先生は「逢瀬を交わして後に相手を恨むようになるよりは、かえって逢うこともなく、長く思い悩んでいたいことだよ」と訳されました。

「逢ふてのち～よりは」の部分は、逢瀬を交わし、親しくなってしまうえば、恋心はより一層勝り苦しむこととなるという意味で、和歌

10月23日（火）

の中でたびたび詠まれたテーマなのだそうです<sup>2</sup>。

マクミランさんははじめ、このように訳されました。

**Rather than meet you, / and bear a grudge / against you. / I  
would rather not meet you / and be sad alone.**

私は「もの思ふ」を「sad alone」と訳しておられる点が気に掛かりました。



<sup>2</sup> 『拾遺集』所収の「あふ事のたえてしなくは中中に人をも身をも怨みざらまし（中納言朝忠）」「あひ見てののちの心にくらぶれば昔

確かに悲しい感情もあるのですが、この場合の「もの思ふ」は恋しい相手を想って切ない気持ち、物思いにふけっている様子をあらわしているのではないのでしょうか。

マクミランさんにうかがってみると、英語の文化圏では、恋しい相手にアプローチせずにその想いを秘めていることについてネガティブな印象があり、「もの思ひ」や秘める恋という状態を感覚として認識しづらいのだとか。

しかし「sad」とは違う感情だということで、「切ない」という雰囲気を出していただくことにしました。

マクミランさんが「and be sad alone」のあとに加えられた文章はこちらです。

**and harbor this feeling of love alone.**

〈この想いを自分だけの湊にする〉という意味で、僧侶や神父といった特殊な事情を持ち、恋心をあらわに出来ない人の切なさというニュアンスにされたとのこと。

文化が違くと、代替可能な言葉がないということもあるのですね！そして、原文にはないニュアンスの文章を取り入れたことで、かえって元の和歌が持つメインの意味を残すことができるというテクニックにも驚きました。

は物もおもはざりけり（言中納言敦忠）」が有名。

10月23日(火)

#### 4,ものの中から見る美学

「住吉の松の葉越しにながむれば 月おちかかるあはぢしま山」

この歌について、米田先生は次のように訳されました。「住吉の松の葉越しに辺りを眺めると、月が沈み掛かった淡路島が見えることよ」。

「葉越し」とは、葉と葉の間を通してなされること、葉の隙間から透いて見えることを指すようで、こういった、物を透かして何かを見ることに美しさを感じる美意識は、中世以降に出来たものなのだそうです。



浮世絵などで枝に切り取られた景色という構図を見かけることが

ありますが、その美意識はこのようなところにもみられるのですね。

マクミランさんは、松の葉が額縁のような役割を果たして月を美しく見せていると考えられ、「月おちかかる」をドラマチックに「The moon about to fall」と訳されました。

また、「あはぢしま山」とは現在の淡路島を指しますが、「山」をそのまま訳してしまうと英語圏の人にはそれが伝わらないため、あえて「island」という語を入れ、次のように訳されました。

Near SUMIYOSHI, / I can see through / the needles of the pine trees. / The moon about to fall / over the island of Awaji.



10月23日(火)

### 5,江戸の美意識との出会い

ところでこの日は、いつもとは違う資料もご覧に入れようと、江戸時代後期に出版されたデザイン集を用意していました。

ご覧いただいたのは『手拭合』(写真上/国文研蔵。貴重書。新DB→<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200008234/viewer> 請求記号 99-99。)と、『小紋雅話』(写真下。個人蔵)です。



デザイン集といっても、実は遊びでつくられた本。

『手拭合』は仲間同士の遊びで手拭いのデザイン案を出しあったもの、『小紋雅話』は、一見珍しい小紋の図柄を集めたように見せかけたでたらめのデザイン集です。

たとえば『小紋雅話』右端の図案、一見丸に鶴の模様ですが、実はちょんまげを上から見た図。このとき本田まげというヘアスタイルが流行っていたので「本田つる」という名前がもっともらしくついています。

ご自身もデザイナーとして活躍しておられるマクミランさんですから、きっと楽しくご覧になるだろうと思ったのですが、予想通り



10月23日(火)

目を輝かせて楽しんでくださいました。

江戸時代の俗文芸とはふざけたものが多いように思われがちですが、実は古典など共通の教養をベースにして、それをずらしたり、反転させたりして笑いを生んでいる知的でお洒落ものが多いのです。

マクミランさんは、こういった遊びの在り方に大変関心を抱かれ、「まさに私が"日本文化とはこういうもの"と考えていた美意識がまっている」と感慨深そうにおっしゃっていました。

今後も、様々な古典籍をご覧にいれながら、それぞれの時代に共通する美意識について考えてゆければと思います。

